

間主観性と空間把握

大藪正彦

1. はじめに

本稿では、間主観性を手がかりとして、日独語における広義の空間把握に見られる異同を論じる。話し手のみならず、聞き手も含めた間主観性を反映する言語現象については、認知言語学や言語類型論における文法化などの議論を通して次第に注目されるようになっていく。例えば Traugott (2003) では、文法化における意味的・語用論的变化に関して、主観化から間主観化へという方向で変化が進むという仮説が提示されている。

(1) 非主観的 > 主観的 > 間主観的 (Traugott 2003)

- a. Let us go, will you? [非主観的]
- b. Let's go, shall we? [主観的]
- c. Let's take our pills now, Roger. [間主観的]

また、とりわけ日本語では、聞き手への注意や配慮を反映する現象が多く見られ、「聞き手めあてのモダリティ」ないし「談話モダリティ」という概念が提唱されている (Horie 2007, 堀江 2008)。

(2) [午後雪が降る] [かもしれない] [ね]。(堀江 2008)

[非主観的意味 (命題)] [主観的意味 (モダリティ)] [間主観的意味 (談話モダリティ)]

しかしながら、日本語の研究史において、聞き手への注意や配慮が言語表現に顕在化するという指摘は決して新しいものではない。「情報のなわばり理論」(神尾 1990) や、さらにそれ以前にも待遇表現との関連で見られるものである。本稿との関連で興味深いものとして、ここではコールドウェル (1976) に言及しておきたい。これは、國廣 (1974) の主張に対する反論として書かれたものである。まず國廣は、英語の *We've got a lot of snow in Hokkaido* に対応する日本語の表現が「北海道は雪が多い」となることを引き合いに出し、英語では人間中心の表現をするのに対し、日本語では人間不在の、状況中心の表現をすると主張した。それに対してコールドウェルは、日本語における実際の会話の中では、話し手・聞き手の関係が必ず文の中に現れてくると指摘し (以下の (3) の各例を参照)、日本語は「純粋に人間不在だとは言えない」、「日本語の方に逆に人間中心的な面がのぞかれる」と述べている (なお、コールドウェルは英語においても複数の表現の可能性があることを指摘している)。

(3) a. We've got a lot of snow in Hokkaido.

b. There's a lot of snow in Hokkaido.

c. 北海道は雪が多いですね。

d. 北海道は雪が多いね。

e. 北海道は雪が多いですよ。

f. 北海道は雪が多いよ。 (コールドウェル 1976)

すぐに気づく通り、國廣が問題にしたのは「人間」を表す語が文中に出てくるかどうかという表層的な面であるのに対し、コールドウェルが着目したのは言語化に際しての話し手・聞き手の（間）主観的な側面であり、そもそもの観点が異なっていると言える。しかしながら、コールドウェルの主張は、近年の日本語についての認知言語学的議論を先取りしていたような部分がある。近年、日本語を特徴づける主観性の問題が様々な形で指摘されているが、この場合の主観性という特徴は、言語化に先行する事態把握のレベルを捉えたものであり、必ずしも明示的に表現されるものではない。逆説的であるが、「自己中心的」な言語化は、「自己」を直接的には言語化しないと言える（池上 2003, 2004, 中村 2004, 2009, 本多 2005 など）。この点については後に取り上げる。

さて、このように、話し手と聞き手の相互作用が色濃く影を落としていると考えられる日本語は、空間把握における間主観性の問題を対照的に論じる際に興味深い視点を提供する。本稿では、空間指示など、空間把握に関する日独両言語の異同を観察しながら、背後の原理について一般化を試みる。

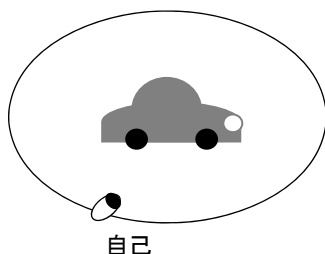
2. 議論のシナリオ

まず筆者の考える議論のシナリオについて概略を示す。次の四つの例文から出発する。これらは、話し手（認知する主体）の視座と言語化の対象（認知される客体）の関係を四つのパターンに分類したものであり、話し手が対象をどう空間的に把握し、言語化するのかという、話し手のスタンスを示すものである（続く四つの図ではそれぞれの状況を簡潔に図示した）。

1. 話し手のスタンス

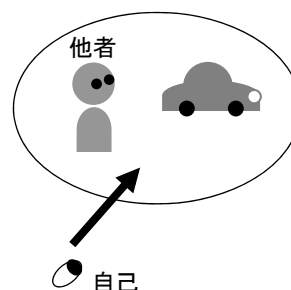
- | | |
|---|--------------------|
| (4) Da vorne steht ein Auto. (= vor mir) | 【主客合一的な事態把握】 → 図 1 |
| (4') Da vorne steht ein Auto. (= vor ihm) | + 〈自己投入〉の状況 → 図 1' |
| (5) Vor ihm steht ein Auto. | 【主客対立的な事態把握】 → 図 2 |
| (5') <u>Vor mir</u> steht ein Auto. | + 〈自己分裂〉の状況 → 図 2' |

〈主客合一的〉な事態把握

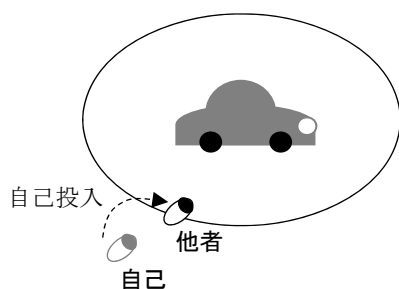


【図 1】

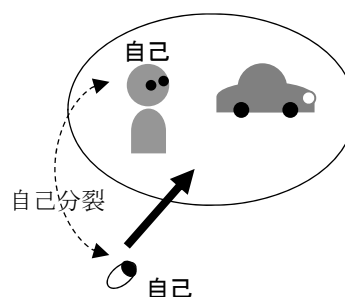
〈主客対立的〉な事態把握



【図 2】



【図 1】



【図 2】

まず例文 (4) は、話し手の目の前にある車について、話し手の「見え」をそのまま表現したものである。指示の方策として、話し手を空間把握の原点とした直示表現 (da vorne) が用いられている。話し手が把握の原点となっているが、話し手自身は言語的に明示されず、暗示的な状態にとどまっている。いわば話し手の視座が事態に張りついた状況であり、主体と客体が未分化な状態であるため、この事態把握のタイプを「主客合一的」な事態把握と呼んでおく。一方、(5) の方は、他者の目の前にある車についての描写である。他者を参照点とした指示表現 (vor ihm) が用いられている。言語化されている事態そのものは、話し手の立ち位置とは切り離された形で言語化されているため、こちらは「主客対立的」な事態把握と呼ぶことにする。

さて、以上の二つの事態把握のタイプに対し、(4') と (5') の表わす状況は、話し手の視座の移動を含んでいる。それぞれ (4), (5) の バリエーションであると考えられるが、(4) の方は、話し手が、本来自己を含まない状況の中に自らの視座を移動して (自己投入して) 事態を把握する場合であり、一方 (5) の方は、話し手が、自己を含む状況について、事態の外へ自らの視座を移動して (自己分裂を経て)、俯瞰的な視座から事態を把握する場合である。

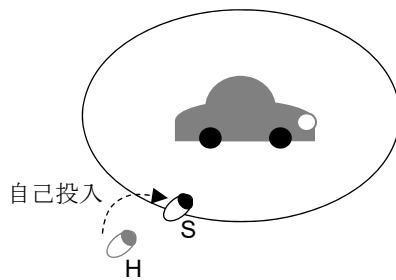
この関連で日本語を特徴づけている重要な点は、日本語ではドイツ語と比べ、事態を「主客合一的」なスタンスで捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強いということである (Ozono 2008, 2013, 2015 などを参照)。

さて、次に聞き手のスタンスについて考えてみよう。話し手が「主客合一的」なスタンスを取る場合、図 3 に示すように、聞き手の方でも相手のスタンスに歩み寄る必要が出てくる。そうすると聞き手も主客合一的なスタンスに立つことになるため、結果、話し手、聞き手、事態の三者が未分化な状態となる。一方、話し手が「主客対立的」なスタンスを取る場合は、図 4 に示すように、聞き手の方でも、言語化され事態に対して距離を置いて向き合うことが可能となる。その結果、話し手と聞き手が向かい合う形での「対話」が可能となる。

II. 聞き手のスタンス

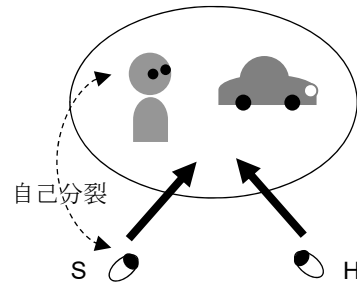
- (6) Da vorne steht ein Auto. (= 4) → 図 3
 (7) Vor mir steht ein Auto. (= 5') → 図 4

同じ型を取る（同型的）



【図3】

能動と受動をやり取りする（相補的）



【図4】

(S=話し手・語り手, H=聞き手・読み手)

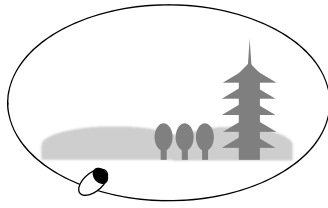
心理学者の浜田によれば、主体と主体が会った時の心のあり方には、二つの可能性があるという。一つは、相互に同じ型を取るというもの（同型性の構図）、もう一つは能動と受動をやり取りするというもの（相補性の構図）である。視点の取り方で言えば、前者は「一緒に見る」、後者は「目が合う」ということになる（浜田 1999）。話し手・聞き手の向き合い方に関しても、同様に二つの型を想定することができよう。そして以上の議論を踏まえるならば、「主客合一的」な事態把握は同型的なスタンスと、「主客対立的」な事態把握は相補的なスタンスとの親和性が高いと想定することができる。

3. 話し手のスタンス

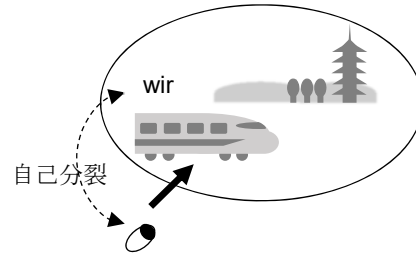
すでに度々指摘されている通り、日本語では、英語やドイツ語などのヨーロッパ言語と比べ、事態を「自己中心的」（egozentrisch）な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強い。その際、自分の「見え」の中に自分はいないため、話し手自身は言語化されないことになる。一方、ドイツ語などの言語では、自己を客体化して言語化する傾向が強い。具体例を見てみよう（以下、引用例文中の下線や太字はすべて本稿の筆者による）。

- (8) a. 今は武蔵の国になりぬ。（更級日記）
b. Jetzt waren wir in der Provinz Musashi. (U. Kemper 訳)
- (9) a. まもなく京都です。（列車のアナウンス）
b. In Kürze erreichen wir Kyoto Hbf.

(8) は、池上 (1981: 252) にも引用されている「更級日記」からの例である。原文では、旅をしている語り手の見た風景の変化がそのまま言語化されている。一方、ドイツ語訳では、話し手自身が客体化されて言語化されている。同様の例は、(9) に見るように、現代日本語でも見つかる。なお、(9) の状況を簡単に図式化したものが次の図 5,6 である。日本語では「自己中心的」な視座が取られている——自己は見えない——のに対し、ドイツ語では「自己分裂」の構図——自己を把握している自己がいるという構図——になっている。



【図5】



【図6】

両者の事態把握のタイプについては前節でも簡単に取り上げたが、ここであらためてまとめておく¹。前者が日本語に特徴的な事態把握，後者がドイツ語に特徴的な事態把握ということになる。

主客合一的な事態把握（主観的事態把握）

話し手は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話し手は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする（＝自己投入）。

主客対立的な事態把握（客観的事態把握）

話し手は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話し手は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態を把握する（＝自己分裂）。

4. 事例：空間把握とその周辺

日独語間で相違の見られる空間関係の表現を見てみると、好まれる事態把握という観点から説明できそうなものがあることに気づく。まず次の例を見てみよう。

- (10) a. ハンドルの前に座る (vgl. *vor dem Fernseher sitzen*)
 b. *hinter dem Steuer sitzen*²

日本語で「ハンドルの前」と表現されるのは、「テレビの前」などと同じく、ハンドル自体に「内在的」(intrinsic)な「前・後ろ」を基準として空間把握が行われているからである。一方、*hinter dem Steuer sitzen*の方はやや複雑である。まず、ドイツ語の表現でも「内在的」な空間把握が行われている。というのも、車がどのような方向に向いていても、あるいは話し手が車に対してどのような位置にしようとも *Jemand sitzt hinter dem Steuer* という言い方は変わらないからである。つまり、話し手の立ち位置を反映した「直示的」(deiktisch)な空

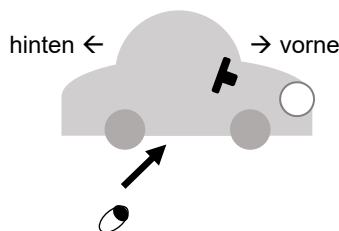
¹ 池上 (2011), Ikegami (2015), Ozono (2008) などに基づく。中村 (2004) による Iモード, Dモードも参照。

² *am Steuer sitzen* も可。

間把握が行われているというふうには言えない。ドイツ語で、「前・後ろ」の基準となっているのは車である。次の図 7,8 を見れば分かるように、日本語の表現は視座が対象に近いのに対し、ドイツ語の表現の視座は、より対象から遠く、俯瞰的であると言える。この状況は、日独語における事態把握の傾向に対し、少なくとも矛盾してはいない。



【図 7】



【図 8】

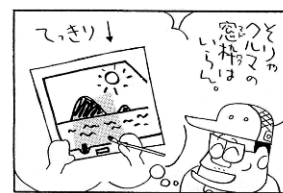
参考までに、右の 4 コマ漫画は朝日新聞に掲載された「ののちゃん」の抜粋で、車を題材としたものである。日本語話者が「主客合一的」（自己中心的）な視座を取りがちであることが、いわゆる「オチ」に利用されていて興味深い。

この関連で、日本語に見られる次のような特徴も指摘できるかもしれない。例文はドイツ語の小説とその日本語訳からの引用である。

- (11) a. Ich sehe das Klassenzimmer vor mir: [...] vorne Tafel, [...] (B. Schlink, *Der Vorleser*)
 b. 教室での光景が目に浮かぶ。[...] 教室の前には黒板があり, [...] (松永美穂訳)

日本語で「(ある対象)の前」と言った場合、その対象の外部の前方なのか、その対象の内部の前方なのかあいまいとなる場合がある。二つの可能性のうち、上例 (11b) のように対象の内部の前方を指す場合、その表現は話し手を空間把握の原点とした直示表現に近いものになっている。つまり「教室」と言っても、この場合の「教室」は、語り手から切り離された客体として俯瞰される対象にはなっていない。むしろ話し手の視座と分かち難く結びついており、「主客合一的」な状況になっている。実際のところ、ドイツ語の原文では語り手を原点とした直示表現 (*vorne*) が用いられている。なお、ドイツ語で *vor dem Klassenzimmer* という表現を用いれば、教室の外部の空間を指すことになるだろう。ここでも、両言語における一般的な事態把握の傾向と平行した状況が見られるわけである。

また、これまでの議論を踏まえるならば、久野 (1978) の視点制約についても一歩進んだ説明が可能となる。ここでは、日本語の「やり・もらい」の表現をドイツ語の対応する表現

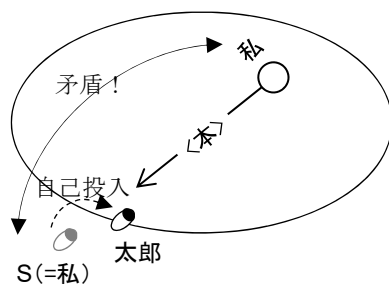


©いしいひさいち
(朝日新聞 2011.8.11)

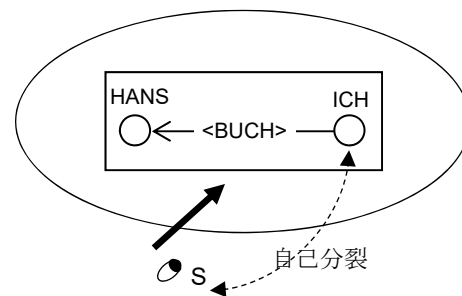
と比べてみよう。

- (12) a. *太郎は私に本を貸してもらった。
b. Hans hat von mir ein Buch geliehen bekommen. (Ozono 2005: 73)

日本語の (12a) の文では、話し手 (=私) が「本」の受け手 (=太郎) 寄りの視点を取っていることが表される。そのため、話し手 (=私) が与え手側として言語化されている点と矛盾するというのが一般的な説明である。そうすると、(12b) のような文が許容されるドイツ語には、視点制約がないということになる。しかしながら、もう一步踏み込んで考えてみるならば、ドイツ語では、話し手が、自己分裂という認知過程を経て、第三者のように言語化されることがごくふつうに行われるという、より一般的なドイツ語の傾向の枠組みの中で捉え直すことが可能であろう。両言語の事態把握のスタンスを図示したのが次の図 9, 10 である。日本語の (12a) では、「太郎」に「自己投入」した話し手の「自己中心的」な視座から事態が把握されており、そもそも自己分裂を伴う主客対立的な構図とは相容れない。一方、ドイツ語の (12b) は、HANS も、(自己分裂を経て) 客体化された ICH も、同等に距離を置いて言語化されており、特に矛盾を生じるような点はないというわけである³。



【図 9】



【図 10】

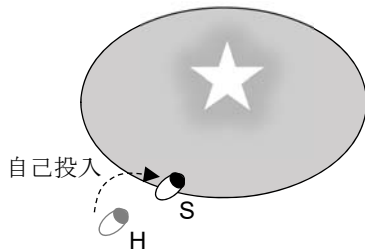
5. 話し手と聞き手のスタンス

第 1.1 節で述べた通り、相対的に「主客合一的」な事態把握が好まれる日本語においては、聞き手もまたこれに応じる形で話し手の発話を理解する必要がある。いわゆる心理述語の例で考えてみよう。心理述語の用法は人称制限という観点から説明されるのが一般的であるが、これを事態把握の観点から捉え直すとうなるであろうか。日本語では、発話の原点に（しばしば言語化されない）自己がいる。特別な文脈がない限り、「寒い」と言えば自分が寒い、「悲しい」と言えば自分が悲しい、「星が見える」と言えば自分に星が見えるということである。話し手がそう言ったなら、聞き手は話し手の視点に寄り添い、話し手の言っていることを話し手の視点から理解する（同型的なスタンス）。一方ドイツ語では、発話している自分自身が *ich* として、距離を置いて言語化される。この点で、ドイツ語の *ich* は 3 人称の *er/sie* などと同列であり、またそれにより話し手と聞き手の両者が、言語化される事態に対し距離を置いて対峙することが可能となる（相補的なスタンス）。舞台のメタファーを

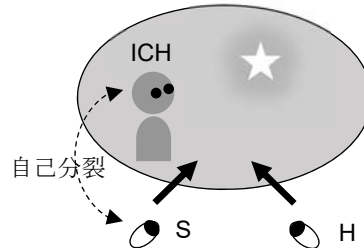
³ 日本語の「行く」「来る」やドイツ語の *kommen* をめぐる制約についても同様に考えることができるだろう。

用いるならば、話し手は自分の分身を舞台の上に置いて、聞き手とともに観客席からそれを見て話をしているという構図になる（それぞれ下の図を参照）。

- (13) a. 星が見える。
b. Ich sehe einen Stern.



【図 11】同型的なスタンス



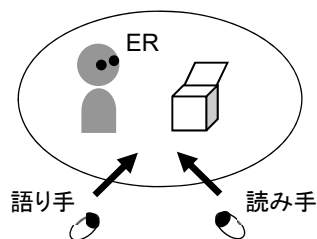
【図 12】相補的なスタンス

6. 事例：言語化されない話し手・聞き手の臨場

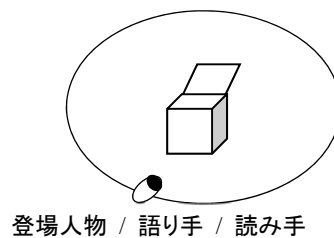
聞き手のスタンスについて、具体例に即して見ていこう。まず、知覚表現を取り上げる。

- (14) a. Wenn ich das Haus auf dem Land sehe, dauert der Traum länger [...] (B. Schlink, *Der Vorleser*)
b. その家が田舎にあるときは、夢はもっと長く続く。(松永美穂訳)
- (15) a. Er fand großartige Sachen darin [...] (E. Kästner, *Das fliegende Klassenzimmer*)
b. すばらしいものが入っていました。(高橋健二訳)

いずれも小説からの引用であるが、ドイツ語の原文では知覚を表す動詞が用いられているのに対し、日本語訳ではそのような動詞は用いられておらず、語り手の知覚した対象の存在がそのまま描写された格好となっている。しかしながらここでは、語り手の「知覚可能な範囲における存在」が描写されているという点が重要である（大藪 2009: 50ff.）。これらの日本語文は、単純に客観的な存在（例えば「静岡には富士山がある」）を描写しているわけではない。語り手が目の前の「見え」について語っているという点において、ドイツ語の知覚表現に対応しているわけである。その際、語り手は事態の中にいわば埋没した格好になっており、その意味において主客合一的な描写となっている。そして読み手もまた、語り手／事態に自己投入する読みを期待され、実際のところ、平均的な日本語話者であればそのように振る舞うのがふつうであろう。ここでの日独の相違を図示すると次のようになる。



【図 13】



【図 14】

さらに次の例を見てみよう。次はいずれも村上春樹の「海辺のカフカ」からの引用であるが、(16)の方は主人公が1人称で描写されている箇所からの引用であり、(17)の方は主人公が3人称で描写されている箇所からの引用である。

- (16) a. 彼女は [...] こちらに視線を向ける。(村上春樹「海辺のカフカ」)
b. [...] sie [...] richtet ihren Blick auf mich. (U. Gräfe 訳)
- (17) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。ナカタさんが後ろを振り向くと [...] 美しい細身のシヤム猫が [...] こちらを見ていた。(ibid.)
b. Auf einmal ertönte hinter ihnen ein leises Lachen. Als Nakata sich umwandte, sah er [...] eine schöne schlanke Siamkatze, die [...] zu ihnen herüberschaute. (ibid.)

まず指示に関する下線部分に着目すると、日本語では「こちら」や「背後」などの直示的な表現が使われている。指示の原点はどこかと問われれば、通常は語り手のいるところということになる。本来その場所は読み手のいる場所とは異なるはずであるが、読み手はこれらの文章を読んだとき、特に問題なく主人公の位置に自分を置いていると思われる。一方、ドイツ語訳の方では、いずれも空間指示の参照点が客観的に表示されている (auf mich, hinter ihnen, zu ihnen)。

さらに次の点も指摘しておいてよいだろう。上述の通り、(16)の主人公は1人称で、(17)の主人公は3人称で描かれている。通常1人称が主人公の場合であれば、その主人公(私)から見た空間把握がなされ、直示表現が用いられやすいというのは理解できる。しかしながら、上の日本語の例では、3人称が主人公の場合も直示表現が用いられている。つまり、語り手は、事態の中に入り込み、そこに臨場する形で、3人称主人公を原点として事態を描写しているわけである(自己投入の状況)。日本人読者であれば、特に違和感なく上のテキストを読むものと思われるが、そうすると読み手の側でも無意識のうちに同じスタンスを取っていることになる。一方で、ドイツ語訳の方は、1人称主人公の場合であっても、直示表現は用いず、主人公自身(私)を明示的に言語化している(自己分裂の状況)。つまり、日本語では一貫して主客合一的なスタンスが取られているのに対し、ドイツ語の方では一貫して主客対立的なスタンスが取られているわけである。ついでながら、(17)のドイツ語訳では、わざわざ知覚動詞の sehen が補われている点も指摘しておきたい(太字部分)。注意深く読めばすぐに気づく通り、日本語の原文の方は主人公(=ナカタさん)の「見え」が描写されているわけであるが、日本人読者が違和感なく読み進めているとするならば、それは取りも直さず、読み手が主人公(=ナカタさん)及び語り手と視点を重ね合わせている、つまり同型的なスタンスを取っているということにはほかならない。

さて、「自己投入的」な読みが行われる(あるいは要求される)代表的な例とえば俳句であろう。次は芭蕉の俳句である。

- (18) a. 一つ家に遊女も寝たり萩と月 (芭蕉)
b. Wir schliefen alle unterm gleichen Dach:
Dirnen und Ginsterblüten,
der Mond und ich. (D. Krusche 訳)

ドイツ語訳では1人称代名詞(wir, ich)が用いられているのが目を引く。学校教育による指導の影響も考えられるとは言え、平均的な日本語母語話者にとって、俳句を臨場的に(「自己投入的」に)読むというのはごく自然なことであろう。この俳句で言えば、作者である芭蕉自身が「一つ家」に寝ていることは自明のことであって、わざわざそれを言語化する必要があるなどとは、通常は思いつきもしないのではないだろうか。それだけに、ドイツ語訳において、とりわけichが補われていることは少なからず驚きを持って受け止められよう⁴。

ところで、臨場的な読みへと誘導する言語的手段として、直示表現の使用が考えられる。次の例に見る通り、俳句のドイツ語訳では直示表現が補われている場合があるが、これらは臨場性を表現するために翻訳者が工夫を凝らした結果であるということが十分に考えられるであろう。

(19) a. 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 (芭蕉)

b. Oh, diese Stille:

Selbst durch die Felsen dringt doch

Des Heimchens Zirpen. (J. Ulenbrook 訳)

(20) a. 白菊の目にたてゝ見る塵もなし (芭蕉)

b. Die weiße Aster,

Die dort vor Augen steht,

Zeigt nicht ein Stäubchen. (J. Ulenbrook 訳)

しかしながら、この点に関して触れておかなければならないのは、最大限に主客合一的な事態把握がなされる場合においては、直示表現すら必要ないという点である。俳句以外の例も見ておこう。

(21) a. 片桐がアパートの部屋に戻ると、巨大な蛙が待っていた。(村上春樹「かえるくん、東京を救う」)

b. Als Katagiri in seine Wohnung kam, wartete dort ein riesenhafter Frosch auf ihn. (U. Gräfe 訳)

インフォーマントによると、下線部のうち、とりわけ dort は義務性が強いようである。また、dort や auf ihn がなければ、誤解が生じる可能性があるとのことであるが、考えてみれば、日本語でも通常の読みとは別の読み——つまり「蛙」が「アパート」以外の場所で「片桐」以外の人を待っていたという読み——が不可能であるとは言い切れないであろう。文成分の義務性は、究極的には、慣用度、定着度の問題として捉えられるべきものなのであろう。

7. 共同注意への指向——結びに代えて

以上、日独語の空間把握に見られる相違を見てきたが、様々な相違の背後に一貫した傾向性が見て取れることを確認した。それらはいずれも両言語の事態把握の傾向に還元できる

⁴ もっともこの場合は、遊女と萩、芭蕉と月という対比を示す狙いもあったと思われる。

ものである。本節では、最後に、残された紙幅で話し手から聞き手への注意・配慮という点について触れておきたい。

日本語では、話し手が「自己中心的」な視座を好んで取るという傾向と関連して、聞き手の方でもその視座に寄り添う傾向があることはすでに見てきた通りである。しかし、注意深く観察すれば、さらに話し手の方でも、聞き手の視線や注意を細かく考慮し、その視線を誘導・調整するような言語的手段を用いていることが分かる。すでにいくつかの先行研究で指摘のある通り、日本語の話し手はいわゆる「共同注意」(Tomasello 1999)を志向し、そのための言語手段を多用している(池上/守屋 2009)。例えば、間投詞、終助詞、直示、特定の構文などの使用が該当する。その一部は、かなりの程度日本語の文法体系に組み込まれていると言ってよいであろう。簡単な例を見てみよう。

(22) このケーキおいしいですね。

(23) このケーキおいしいですよ。

冒頭で紹介したコールドウェルも触れている通り、日本語の終助詞「ね」や「よ」は、会話においては必須の要素である。例えば、「このケーキおいしいです」－「はい、おいしいです」という会話は、日本語としては極めて不自然である。終助詞の使い分けを考える場合は、「共同注意」という概念が有効になる。簡単に言えば、終助詞は、話し手と聞き手の間の「共同注意」の確立をめぐって使い分けられていると言える(池上/守屋 2009: 142ff.)。

一方、日本語との対照を通じて、ドイツ語でも間主観性を反映した言語現象が潜在的・顕在的に存在することが見えてくる(大藪 2012, Ozono 2013)。心態詞などはその好例であろう。本稿では詳しく取り上げる余裕がないが、間主観性の観点から論じるべきドイツ語の現象として、例えば次のようなものを指摘することができる。

- | | |
|--|-----------|
| (24) Wann schenkst du ihm <u>denn</u> den Fußball? | [心態詞] |
| (25) Wie haben <u>wir</u> denn heute nacht geschlafen? | [wir の使用] |
| (26) <u>Dieser</u> Peter ist ein netter Kerl. | [直示] |
| (27) <u>Das Buch da</u> , ich glaub, ich kenne den Autor. | [自由テーマ] |
| (28) <u>Das Buch</u> , das habe ich doch gestern zurückgebracht. | [左方転移] |

これら一連の表現に関して、日独語間の重要な相違はその義務性にある。例えば、次に見る通り、日本語の終助詞に比して、ドイツ語の心態詞の義務性はそれ程高くない(神尾 1990, Ueki 1993 による「情報のなわばり」の議論も参照)。

(29) a. いい天気ですね。

b. Es ist schönes Wetter.

最後に、自己投入による臨場性の問題は、時制や法の問題にもつながっていくものである。これらは、一見、空間把握の問題とは無関係に思われるかもしれないが、事態に対する話し手・聞き手のスタンスの取り方が問題となっているという点で、これまでの議論の延長

線上にあるものである。次の絵本からの例に見るように、日本語の語り手・読み手は容易に事態の中に入り込んでしまうという印象を受ける。一方ドイツ語においては、絵本であっても同じことはなかなか容易ではない。これらも、本稿で論じた二つの事態把握のタイプとの関連で捉えられるべき重要な問題であると思われる。

- (30) a. ある日のことです。ひさしぶりに まどをあけてみると… なんていいお天気でしょう! (湯本香樹実「くまとやまねこ」)
b. *Eines Tages, nach langer Zeit, öffnete er wieder einmal das Fenster und die Sonne strahlte [...]* (U. Gräfe 訳)
- (31) a. *Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie fuhren nach Hause.* (H. Heine, *Freunde*)
b. いつのまにか かげが なが なくなった。 3 びきの せたけ よりも ほら こんなに。 さあ うちへ かえろう。 (池田香代子訳)

参考文献

- コールドウェル, ジョン・S (1976): 「存在表現と所有表現——会話のなかの文化と個人」『言語』3月号, 70-75.
浜田寿美男 (1999): 『「私」とは何か』講談社。
本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会。
Horie, Kaoru (2007): Subjectification and Intersubjectification in Japanese. A Comparative-typological Perspective. *Journal of Historical Pragmatics* 8 (2), 311-323.
堀江薫 (2008): 「間主観化——文法の語用論的基盤のタイポロジーに向けて」『言語』5月号, 36-41.
池上嘉彦 (1981): 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
池上嘉彦 (2003; 2004): 「言語における〈主観性〉と〈客観性〉の言語的指標 (1); (2)」山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 3; No. 4』ひつじ書房, 1-49; 1-60。
池上嘉彦 (2011): 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編): 『主観性と主体性』ひつじ書房, 49-67。
Ikegami, Yoshihiko (2015): 'Subjective Construal' and 'Objective Construal'. A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation. *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 1-21.
池上嘉彦/守屋三千代 (編) (2009): 『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房。
神尾昭雄 (1990): 『情報のなわ張り理論』大修館書店。
國広哲彌 (1974): 「文化の中の言語」『言語』6月号, 27-31。
久野暉 (1978): 『談話の文法』大修館書店。
中村芳久 (2004): 「主観性の言語学」中村芳久 (編): 『認知文法論 II』大修館書店, 3-51。
中村芳久 (2009): 「認知モードの射程」坪本篤朗ほか (編): 『「内」と「外」の言語学』開拓社, 353-393。
Ozono, Masahiko (2005): *Das bekommen*-Passiv aus japanischer Sicht. In: Narita, Takashi u.a. (Hg.): *Deutsch aus ferner Nähe*. Tübingen: Stauffenburg, 57-77.
Ozono, Masahiko (2008): Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in kontrastiver Sicht. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
大藪正彦 (2009): 「コーパスとドイツ語教育——日本人のための「自然なドイツ語」の提供を目指して」田中慎 (編): 『コーパスをめぐって』(日本独文学会研究叢書 67), 41-56。

- 大藪正彦 (2012): 「翻訳と聞き手・読み手の視点——共同注意を軸とした日独語対照研究」竹内義晴 (編): 『翻訳という問題から見えてくる言語, 文化, 人間』(日本独文学会研究叢書 85), 40-56.
- Ozono, Masahiko (2013): Intersubjektivität im deutsch-japanischen Kontrast. Perspektivische Interaktion zwischen Sprecher und Hörer. In: JGG (Hg.): *Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft*. München: Iudicium, 88-102.
- Ozono, Masahiko (2015): „Sprachwissenschaft des Tuns und des Werdens“ in ihrer heutigen Dimension. In: JGG (Hg.): *Translation und deutsch-japanische kontrastive Grammatik*. München: Iudicium, 35-48.
- Tomasello, Michael (1999): *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard UP.
- Traugott, Elizabeth C. (2003): From Subjectification to Intersubjectification. In: Hickey, Raymond (ed.): *Motives for Language Change*. Cambridge: Cambridge UP, 124-139.
- Ueki, Michiko (1993): Problematik bei der Übertragung von deutschen und japanischen Fachtexten. In: Frank, Armin Paul u.a. (Hg.): *Übersetzen, verstehen, Brücken bauen*. Berlin: Erich Schmidt, 228-236.

Masahiko Ozono: Intersubjektivität bei der Raumwahrnehmung. Erschien in: Hiroyuki Miyashita (Hg.): *Raumerfassung im Deutschen und im Japanischen. Wie sich Kognition in der Typologie widerspiegelt* (Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 112), 51-65. 2016.